

聖書：第一列王記1章32～40節

説教：私は彼を君主に任命した

あらすじ

イスラエルの王であるダビデは年をとり、介護する者の手を借りなければ日常生活を送ることができないほど体が不自由になってきています。ダビデの息子であるアドニヤは、そんな父親の姿を見て、これこそ千載一遇のチャンスととらえ、父親に無断で「きょうから自分はイスラエルの王である」と宣言します。今のことばで言えばクーデターです。力づくで王になろうとするのですから、当然邪魔な者たちを消す必要があります。だれが邪魔か。次の王と目されていたソロモンとその母バテ・シェバ。いまこの二人のいのちがあぶなくなります。

預言者ナタンはアドニヤが反乱を起こしたとの情報をキャッチしたとき、まっさきに考えたのがこの二人のことです。すぐにバテ・シェバのもとに走り、こんな助言をします。「いますぐダビデ王に面会し、あなたの子であるソロモンがダビデ王の跡を継いで王となるようお願いしなさい。そうやってあなたとソロモンのいのちを救いなさい。」

バテ・シェバはすぐにダビデ王のところに行き、指示どおりにします。でもそれは簡単なことではありませんでした。ダビデに対して即刻王さまの地位を退いてくださいと言うのを同じです。機嫌を損ねれば、たとえ妻であろうともいのちを失うこともあり得ます。でも自分と息子ソロモンが助かるにはそうするしかありません。バテ・シェバはいのちをかけてダビデに語ります。ナタンも途中から入ってきて、バテ・シェバを助けます。

ダビデは最初何が起きたのか混乱したようです。けれども、ようやく事の重大さに気がつき、「ソロモンがダビデに代わって王座に着く」と誓います。それが前回までのあらすじです。

1 ダビデが語ったこと

1) 私の雌驢馬に乗せて

すぐにダビデは、祭司ツァドク、預言者ナタン、そしてベナヤの三人を呼び、ソロモンに王座を譲るための手順について細かな指示をしていきます。その中から二つのことに注目したいと思います。一つ目は、

33節にあります。「私の子ソロモンを私の雌驢馬に乗せ、彼を連れてギホンへ下って行きなさい。」

なぜわざわざ「私の雌驢馬に乗せて」と言うのか不思議に思うかもしれません。これには政治的な意味があります。どういうことか。皆さんがイスラエルの国民であったと考えてみてください。ある日突然、ダビデ家の御曹司であるアドニヤが政府のVIPを呼び盛大なパーティを開き、「今日から私はイスラエルの王になりました」と宣言するのを聞いたとします。それから間もなく今度は、ギホンでソロモンがイスラエルの王であると宣言するのを聞く。人々が大いに戸惑うことは想像できるはずですが、同時にふたりの王さまが立つはずはありませんから、どちらかが本物で、どちらかが偽物です。いったいどうやって判断するでしょう。人の数ででしょうか。そうしたらアドニヤが本物らしく見えます。

でももし、ソロモンがダビデ王の紋章が入っているものをもっていたらどうでしょう。それを見ただけでどちらが本物の王であるか迷うことなく判断できるでしょう。それでダビデは言うのです。「私の子ソロモンを私の雌騾馬に乗せなさい。」ダビデが正式にソロモンを次のイスラエルの王に任命したことが一目でわかるように、このような指示を出しました。

2) 私の王座に着く

続いてダビデが出した指示の中で注目したいことばの二つ目は、35節です。「彼は来て、私の王座に着き、彼が私に代わって王となる。」ソロモンがダビデに代わって王座に着く。当たり前のことを語っただけに見えます。でも、考えてみましょう。彼は、若いときから一生懸命イスラエルのために苦勞してきたのです。もうだめかもしれないというような危険な目に何度も遭い、時には名誉も財産も家族も友人も失い、信頼していた者には密告され、そして最後には息子にも裏切られてきました。そのようにしてなんとかイスラエルの平和のために尽くしてきたのです。そのダビデが王の地位をソロモンに譲ると決断しました。ダビデの使命は終わったのです。からだとしては生きていますが、王の座を譲ると言うことは、自分が死ぬこととほとんど同じです。自分が死ぬとき、それが王座を譲るとき。おそらくそう思っていた。だから、ダビデはずっと今まで世継ぎを指名してこなかった。平和な時代であればそれでもよかったかもしれない。でもアドニヤが反乱を起こしてしまった以上、そうはいかない。混乱するイスラエルを救い、バテ・シェバとソロモンを救うためには、自分が死んで、今

王の座を手放すしかありません。

「彼は来て、私の王座に着き、彼が私に代わって王となる。」こう宣言したとき、ダビデは自分の死を覚悟したことになります。

2 ベナヤが見ているもの

1) 「王さまの神、主も、そう言われますように」

続く36、37節にベナヤがダビデのことばにどのように応答したのかが記録されています。「アーメン。王さまの神、主も、そう言われますように。主が、王さまとともにおられたように、ソロモンとともにおられ、彼の王座を、わが君、ダビデ王の王座よりもすぐれたものとされますように。」

私たちがよく使う「アーメン」は、「そのとおりです」と意味ですが、ベナヤも真つ先にこのことばを口にしています。彼は、王座を譲る決断をしたダビデに、うやうやしく頭を下げながら、忠実な部下として賛成のことばを述べているようです。映画やドラマの中に出て来るようなありふれたセリフにも聞こえます。でも、いつも言いますが、聖書は私たちの救いのために書かれているのです。ベナヤのことばも、ありふれたお世辞ではなく、救いと関係していると見るべきでしょう。

ヒントは、「王さまの神、主も、そう言われますように」にあります。もう少しわかりやすく訳し直せばベナヤはこう語っていたことになります。「ダビデ王が今述べられたことは、まさに神である主が語ったことばであると私は信じます。」

ベナヤはダビデの前に立ち、直接にはダビデに応答してはいます。けれども、どうもそれだけでは説明がつかない。ベナヤは、まるでダビデの背後におられる神である主に向

かって語っているように聞こえます。

2) 「ダビデの王座よりもすぐれたものとされますように」

もしそうであるなら、次のことばはどのような意味になるでしょうか。「彼の王座を、わが君、ダビデ王の王座よりもすぐれたものとされますように。」

もしみなさんがダビデであったとして、こう言ったとしましょう。「ソロモンに王座を譲るからあとはよろしく。」これに対して部下が、こう答える。「ダビデ王と同じくらい、ソロモン王も栄えますように。」これは納得できます。ところが部下であるベナヤは、「ダビデ王よりもソロモン王が栄えますように」と応えました。どう思いますか。ダビデ王が退くと言った途端に、ソロモンがもっとすばらしいと言ったようなものです。ダビデに対してあまりにも失礼ではないか。でもベナヤは堂々と言う。なぜ言えるのでしょうか。

ダビデはソロモンに王座を譲るためにどうしたらよいか、そのことをくわしく語りました。でもダビデはそれだけを語ったのではない。それと同時に、やがて来られる救い主が、どのようなことをされるのかも語っていたのではないか。ベナヤはそのことを聞き取ったので、このようなことが言えた。ダビデもベナヤも、今自分たちは、神である主の前に立っていると自覚しています。主がすべての中心におられます。主がすべてを御支配し、主がいま救いのみわぎをなそうとしていることを感じています。だから自然にこのことばが出て来て、ダビデもベナヤのことばを受けとめることができました。

では、ダビデはやがて来られる救い主についてどんなことを預言したことになるのか。

3 イエス・キリスト

1) ろばに乗って入城する(マタイ 21章7, 8節)

三つのことを取り上げます。その一つ目。ダビデはソロモンを自分の雌騾馬に乗せなさいと命令します。雌騾馬に乗った者がイスラエルの王であることの印だと言いました。イエス・キリストはどうだったのでしょうか。マタイの福音書 21章7, 8節「(弟子たちは) ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。すると、群衆のうちの大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切って来て、道に敷いた。」これはイエスがエルサレムに入城するときの様子です。マタイではろばとなっていて、雌騾馬とは違うことばになっていますが、原語で見ると親戚関係のことばが使われています。なぜ人々が大喜びしながらイエスを迎えたのかわかりますか。イスラエルの王はろばに乗ってやって来る。ダビデが預言したことばが現実となったからです。

2) ユダヤ人(イスラエル)の王となる(ヨハネ 19章19節)

ダビデが救い主について預言した二つ目のこと。ダビデは「彼に油を注いでいイスラエルの王としなさい」と語りました。イエス・キリストはどうだったのか。キリストとは「油注がれた者」という意味ですが、この方はほんとうにイスラエルの王となったのでしょうか。ヨハネの福音書 19章19節にこうあります。「ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには、『ユダヤ人の王ナザレ人イエス』と書いてあった。」イ

イスラエルはユダヤ人の国でしたから、確かにこの方はイスラエルの王とされました。ただし、十字架の上に掲げられた罪状書きとしてででした。その罪状書きの下には、裸にされたイエスがつるされていました。確かにダビデの預言のとおりとなります。

3) 彼が王座に着く (30節)

ダビデが預言したことの三つ目。35節の「彼は来て、私の王座に着き、彼が私に代わって王となる。」ダビデはバテ・シェバやソロモン、そしてイスラエルを救うために自分が死ななければならないと悟りました。イスラエルの王座とはそのような場所であることをダビデは示しました。イスラエルの王座に着く者は、イスラエルを救うために死ななければならないのです。ダビデの後に来て、ダビデに代わって王座に着く者は、誰の目にもはっきりとわかる形で死ぬことになる。ダビデはそのことを預言します。

そしてその締めくくりとしてこう宣言します。「私は彼をイスラエルとユダの君主に任命した。」ダビデの口を通して神が約束されました。神である方は彼、すなわちやがて来られるイエス・キリストをイスラエルとユダの君主に任命する。

その方が来られるとき、この地上に救いをもたらされていく。主は必ずそのことを成し遂げる。イエス・キリストが来られる千年も前に、主はダビデの口を通してこのように救いのご計画を明らかにしてくださいました。

千年も待たされた、と言うでしょうか。私たちの目には遅すぎるように見えるかも知れません。しかし主は言われます。イザヤ書46章13節「わたしの救いは遅れることがない。わたしはシオンに救いを与え、イス

ラエルにわたしの光栄を与える。」

遅れることのない主の約束を待ち望んでいきます。